

株式会社大橋洋食器 代表取締役会長

おおはし えつこ  
大橋 恵津子氏

## テーブルウェアを通じて地域が誇る 伝統・技術を未来へとつなぐ



### PROFILE

1956年 大橋洋食器三代目社長 明自の次女として生まれる。  
1979年 東京女子大学英米文学科卒業。結婚後、夫である四代目社長 厚男と共に会社を支えたが、2012年に夫が他界し代表取締役に就任する。

今年で140周年を迎える大橋洋食器は、国内のホテルや飲食店を主軸に海外との取引も行う食器類卸販売の老舗企業。新潟や日本各地の伝統・技術を活かしたテーブルウェア、SDGs食器などオリジナル商品の開発にも取り組む同社の大橋会長に、お話を伺いました。



株式会社大橋洋食器

〒951-8067

新潟市中央区本町通8番町1352番地

TEL:025-228-4941

<https://www.ohashi-web.co.jp/>

新潟の産業を世界に発信することも、私たちの使命の一つ。商品の開発や販売は伝統工芸の職人や工房を守ることに繋がると思います

### 伝統と新しい価値観が融合したオリジナル商品を企画・開発

大橋洋食器は1886年（明治19年）、五泉市出身の初代が石油ランプを取り扱う会社として創業し、その後、洋食器の卸販売に事業を転換。長年に渡りホテルや飲食店向けに幅広い商品を提供してきたが、10数年前からはオリジナル商品の企画・開発にも力を入れている。「モノづくりをする起点となったのが、石巻市雄勝町の“雄勝石”を使った“すずり石プレート”です。私の夫が社長のとき、スペインの人気レストランで使われていた黒い石の皿に感銘を受け、日本の石を探して出会ったのが、すずりに使われていた雄勝石でした。地元の業者さんの協力を得て開発することができた、大事な商品です」と大橋会長。その後も新潟の伝統工芸や各地の素材・技術を取り入れた商品を次々と生み出している。「伝統と新しい価値観が融合していることで、現代の方に受け入れられる商品になっていると感じます。それとともに新潟の伝統産業を守ることに繋がります」。

### 創業時から続く“進取の気性”が140年の歴史を支える

今年で140周年を迎えるが、初代から大切にしているのが“進取の気性”だという。「変化を恐れず、時代の流れを読んで新しいものを取り入れていく。そして作り手の思いや商品の価値を私たちがお客様にきちんと伝えていく。それがここまで続けてこられた要因になっていると思います」と話すように、時代の変化を捉え、近年取り組んでいるのが食品廃棄物を利用したSDGs食器の開発



すずり石プレート「絆」は、2013年にグッドデザイン賞を受賞。加茂伝統の組子とガラスを組み合わせたプレートは、海外での人気も高い。



「Re:CAFE」シリーズは、“鈴木コーヒー”のカフェから出るコーヒー残渣を利用。カップは温かみのある色合いが魅力だ。

だ。第一弾の「Re:CAFE」シリーズは、コーヒー抽出後の出がらしを原料の一部に利用し、カップやカトラリーを製造。循環型のモノづくりは注目を浴び、ストーリー性を重視するお客様にも好評だという。

### 一般のお客様との接点を増やし多くの人に食器を楽しんでほしい

「商工会議所さんから特定退職金共済制度、あんしん財団のご紹介を受け、利用させていただいています。また、海外からご注文をいただいた際、輸出に関する難しい手続きもお手伝いしていただけるので安心です」と大橋会長。

今後は新潟が誇る技術やモノづくりを発信するとともに、小売りにも目を向けていきたいという。「今年2月に一般のお客様を対象にした“感謝祭”を8年ぶりに開催したのですが、3日間大勢の方に来ていただきました。この10数年はオリジナル商品の開発に注力してきましたが、今後は一般のお客様と接する機会を増やし、多くの方に食器を楽しんでいただきたいと思っています」。長い歴史の中で培った経験を活かし、新たな時代に受け入れられるテーブルウェアを提供していく。



本社2階のショールームは、一般のお客様も見学可能（予約不要）。同社が扱う幅広いテーブルウェアを手にとって見るができる。



アフタヌーンティーの定着により、近年ティースタンドが人気に。有名店や企業の要望に応えたオリジナル品の依頼も多い。